

グループ別ディスカッション：
バイリンガルなわが子への日本語指導

報告：岸本俊子

はじめに

アメリカにおける日本人年少者への日本語教育はハワイ西海岸地域の戦前の移住者によって始められた日本人学校から、戦後の日本企業の進出に伴ういわゆる海外子女への国語補習教育としての補習校と様々であるが、国際化の流れの中で米国に永住を決めた家庭の子弟、また国際結婚による子弟への日本語教育、という新局面がでてきた。家庭で2言語が併用されている場合、また滞在が長期化し親とは日本語で話す但兄弟姉妹間では英語という家庭が多い。しかし誰もがわが子への日本語習得を願っているが、彼等に対する適切な日本語教育が行われていないのが現状である。今回は中島和子氏の「バイリンガルへの道」という講演が講演者急病で延期されたため當作靖彦氏の講演「言語環境と高度の思考力：米国大学に進学した補習校卒業生の抱える言語上の問題」と久保田竜子氏の「バイリンガル教育入門」の講演を御願ひした。その後、「バイリンガルなわが子への日本語」と題してこの新しいグループに属す保護者を子供の年令別に分け、子供たちのおかれている状況を本音で話し合うことから、かれらの能力に応じた適切な日本語教育を模索していこうという狙いでこのグループ別ディスカッションを企画した。年少者グループはコロラド大学 清水秀子氏（コロラド大学）、小学生グループは菊池正人氏（ジョージア工科大学）、中学高校グループは松田由貴氏（メンフィス大学）、教師グループは久保田竜子氏が（ノースカロライナ大学）が各々司会を担当した。以下、各グループの報告内容である。

年少者グループ報告

今回の話し合いをとおして、年少者への日本語は家庭環境、出生地など様々な要因が関わっており、いろいろなケースがあることが分かった。それと、外的な要因と内的な要因があつて、家庭環境、その家庭をとりまく社会環境とか海外生活、日本からアメリカに来たときに何歳であつたかといったような、そういった年齢的なことが関わると同時に、子供自身が持っている内的要因が関わっているのではないか。それから、両親自身の信念も大きくかかわっていることが分かった。どのように日本語を学んでほしいのか、日本語のネイティブと同じようにしたいのか、英語圏に育つて英語を中心にしていくのだからその中で英語との割合とか、両親の日本語に対する考え方も影響してくると思う。

ケース（1）子供が4歳と2歳の時に渡米してきたケース。

上のお子さんはお姉さんで、彼女自身日本人だという意識が高かった。それで、母親との日本語でインター・アクションというか、相互作用というのが高かったケースで、一方弟の方は渡米時2歳で、初めからあまり日本語を話さないというか、2歳児なので日本語が確率してない段階にあった。本人もあまり日本や日本語に対する興味が薄かったのか、母親とのインター・アクションは少なかった。成長して、姉は高校時に自分から日本に行きたいと希望し、20歳を過ぎて成人となった今、日本語をネイティブと同じように話すのに対して、弟のほうは日本語能力が姉に比べるとかなり低い結果となっている。それぞれの成長段階で色々な要因が入っている例として興味深い。

ケース（2）マルチ言語家庭環境

父親が日本人で、母親はギリシヤ人。両親の会話は英語であるが父は子供に日本語を、母はギリシヤ語を話すという三つの言語が家庭内で使われている例。そうした場合、コードスイッチがあって、いわゆるシンタックスのほうはギリシヤ語で入っていて、語彙は日本語で入っている。

ケース（3）両親の言語が日本語だけの場合

この場合は他からのアドバイス（外圧）を受け入れるか、受け入れないかという問題がある。アドバイスを受け入れて家では日本語を使うことを選んだということで、両親の決断が子供の日本語力に関連してくる例である。もうひとつのケースは、決断抜きで日本語になっている例。両親は日本人で、子供は5歳と3歳。家で日本語を使用するのは両親が英語が得意ではないという意識があるためで、やや消極的な理由からくるものである。両親の英語に対する自信の有無も子供の言語発達に影響をおよぼす要因と思われる。

ケース（4）心理的なものが影響している例

2歳と4歳のお子さんで、娘さんが日本に帰って、息子さんがアメリカに残ったというケースで、息子さんは初め、デイケアか幼稚園に行ったときに、1年間ほとんどしゃべらなかった。あるとき、他の子供たちは他の活動をしているのに、その息子さんは一人で大の字になって床にころがっていたというのを、母親は息子の精一杯の抵抗、自己表現だったのではないかと考えたそう。その息子が、姉が帰国してもアメリカに残っているという点にとっても興味がある。

言葉は心理的な要因で影響をうけるとしてこんな例があげられた。母親と話

しているときは日本語で、学校では英語を話している子供が、母親と一緒に学校の行事に参加したときに、英語も日本語も話さなくなるという。なぜ話さなくなったのかとい

う理由はまだよく分からないが、心理的にどちらの言葉を使っていいのかということで迷いがあったのかもしれない。

その他、読書好きな子供はともかくとして、あまり本を読まない子供にどのように日本語を教えていくかという問題についても話し合った。また、英語力と日本語力のバランスというか、アメリカで育っているのだから英語力をつけてやりたいが、日本語能力も伸ばしたいというその間のジレンマをかんじている年少者の親が多いことがこのディスカッションを通して浮き彫りにされた。

小学生グループ報告

このグループでは、主に文化・言語の狭間において苦しんでいる家庭の様々な問題について話しあった。

(1) 言語障害の疑いを受ける

就学年令をすぎて渡米して来た場合、また日本語が未定着な状態で日本から来て、それから英語を始めた場合。両方のケースともまだ言語が完全には獲得されていない状態にあるケース。現地校で内気な子がなかなか話しはじめないので、障害を疑われたケース等が報告された。実際にスピーチセラピストのところに送られ、障害の有無について検査を受けさせられたが、結果は障害なしであったようだ。

(2) 現地校の成績が芳しくないので学年を下げる弊害

家庭内では一応問題はなく、また日常的な英語には苦勞していないが、アカデミックな面ではやはり遅れをとっている例が報告された。例えば、現地校の宿題は突然3年生位から増え、それによるストレス、またそのストレスをハンドルしきれない子供。それに対応するために、年齢は小学校3年生の子供を1年下のクラスに入れる。それをやったために、自尊心というか、プライドが傷ついた可能性がある。というわけで逆に問題が増えてしまった、そういうケースも報告された。

(3) 補習校／現地校に何を望むか

1. 子供達は日本語を話すレベルはクリアしているが、ある意味で限られた日本語生活のなかでボンヤリと掴んでいる傾向にある。補習校の授業の中に日本語の文法とか、基礎に関する話しも入れることにより確実に日本語の力が上がるよう工夫してほしい。
2. 読書の必要性、日本語能力向上のツールとしての価値の高さが認識されているにも拘わらず、超特急授業のため読書指導の時間ももたれていない。読書奨励に対する指

導が欲しい。

3. 現地校の先生の配慮は子供のアメリカ生活に非常に大きく影響するもので、いい先

生にめぐり合った場合、子供はすごく伸びる可能性があるが、そういうことに関して士気を持たない先生にめぐり合った場合はその子供が苦勞する。

(4) 家庭での言語は1ヶ国語がいいのか？

家庭言語は1ヶ国語に統一したほうがやっぱりいいのではないかということが出た。それぞれの、例えば父親がフランス語、母親が日本語、子供は3ヶ国語をマネージしなくてはいけない、そういう家庭もあり、そのような家庭ではどの言葉も100%ではないため、それによる苦勞が増えている。こういった環境においては、例えば1言語、多分英語になると思われるが、英語なら英語にフォーカスを当てて、その言語を出来るだけ伸ばしてあげて、継承語の読み書きに関することは大人になってから、あるいは大学生とか大きくなってからそれを習得するのでもいいのではないかという提案も出た。

中学高校グループ報告

このグループのメンバーは中学生高校生の保護者、アメリカ生まれの子供をすでに大学に進学させた親、補習校出身の学生を大学で教えている者、中学生高校生を教えている者という構成で、異文化の中での子供達のアイデンティティの問題、米国における日本人のステイタス等について話し合った。

環境になじめない

急に日本からアメリカに来て、全く違う環境に入るわけだから、環境になかなかなじめない。しかも日本語が通用しないので、自分の言語を取られてしまったという悩みがある。学校での宿題も大変で、どんどんコンプレックスを感じて、自分はなんなの？というような悩みが増えてくる。

周囲に認めてもらえない

バイリンガルの子供は英語も日本語も出来て当たり前と思われてしまう。日本語を勉強している学生は、ちょっと日本語が出来るだけですごいと褒められるのに、バイリンガルの子は英語も日本語も完璧ではなくても、本当はすごいことなのになかなかレコグニションをもらえないので励みにならない。小学校を卒業するときにアメリカ人の子供は様々な賞をもらう。日本から来た子供は、学校のカリキュラムについていくのがなかなか大変で賞をもらうほどの成績は取れていない。ということで、取

り残されそうになるかと思ったところ、学校側のほうが気を遣って、実は日本から来て、ゼロから始めた子がいるんですよ、こんなにがんばりましたよってレコグニションしてくれた。父兄のかたも皆さんで褒めてくれた。これは小学校の話で、学年が上がって

くると上げ底の表彰には納得できない自己の目覚めもあり高学年の子供の心情は複雑だ。

将来の進路への不安

就職や将来どうするかは彼等にとって深刻な問題である。まず21歳になったときに国籍を選択しなければならない。アメリカ国籍を選ぶのか、それとも日本の国籍を選ぶのか。そういったことで、「私は何なの？どっちに行けばいいの？私の人生どうなるの？」というアイデンティティの問題がでてくる。たとえ日本の国籍を選んでこっちに残ることになっても、今度はビザの問題で困ることも出てくる。また米国での日本人のステータスにも悩みをもち、将来どれだけやっていけるか心配しているという意見もあった。高校生の中には日本の帰国子女枠で有名大学に入っても、入った後どうするの？という将来に対する不安が非常に強いとのことだ。

このグループでは子供の心の問題が非常に大きいこと、それに親がどのように対処していいのかわからず、皆で子供達の悩みを持ち寄った結果になった。このアイデンティティ、「私は何なの？」、「私はこれからどうなるの？」というのは永遠の問題なのであろう。ひとつ興味深かったのはアメリカ育ちの子供たちの99%以上が、米国で仕事をするならアメリカの企業を望んでいるという事実。アメリカに長く住んでいるというのはアメリカの文化になじんでいるからで、日本より居心地がいいということであろう。

教師グループ報告

教師グループでは大まかに分けて、保護者の言語習得に関する知識を深めるためにどうしたらいいのか、教師の言語習得に関する知識を深めるためにどうしたらいいのか、教師同士のネットワークを作るためにはどうしたらいいのかについて話し合った。

(1) 保護者の言語習得に関する知識が非常に乏しい、その対策

ある学校ではウェブサイトを作って色々な情報を流しているが、全員が読んでいないわけではない。ワークショップなどを継続的に行って、保護者に対して知識を

深めてもらうよう働きかけることが必要なのではないか。来られない人には、ビデオに録って見せたり、貸し出しをしたりとか、そういう形にしたらいいいのではないか。また、ワークショップのビデオを見ることを、補習校に入学の条件とする案もだされた。親同士の話し合いを深めるために話し合いの機会を設けたり、メーリング・リストを作ると

いうアイデアも出た。また保護者に、現地校の情報を与えることも非常に必要なのではないかと。領事館で、ある程度の情報は得られるということだった。保護者の意識を高めるために補習校の図書館にバイリンガル教育とか、それに関する本とか資料を置いたらどうかというようなアイデアがでた。これは、保護者だけでなく、教師自身の意識を高めるという意味でも非常に効果的なのではないか。本にも色々あるので、精選して置くのも必要という意見が出された。

(2) 教師のための啓蒙活動

教師のための講習会などを開くと同時に、運営委員の意識を高めるのも必要である。それから、教師のネットワークを作ることが必要だという話から、ATJの分科会である継承日本語研究会等に補習校の先生をネットワークすることを考えてもいいのではないかと提案されたが、どこから手をつけていいのか少々難しい問題だということになった。

(3) その他

そのほか話し合われたこととして、現地採用教師と派遣校長先生との円滑な関係の必要性、直に子供への教育につながるためである。また学習者間の学力の開きをどのように扱ったらいいのか。つまりマルチレベル、マルチアビリティのクラスの教え方をどうしたらいいのか。ATJの研究論文に出てきたものを、現場の先生に伝えるシステムの構築、それから、また、なんとかして補習校の先生同士のネットワークをつくって、実践報告などをウェブサイトで発表したり、教授法をシェアしたりすることの必要性が話し合われた。

おわりに

一言に「バイリンガルなわが子への日本語」といっても子供の年令、言語習得ステージによって焦点を合わせるポイントが全くちがうことが、はっきりと示されたのが今回のグループ別ディスカッションの報告であった。ここでは保護者が個々に抱えている問題点を出してもらって留まっているが、一刻も早く解決されなければならない問題、言い換えれば今後早急に調査研究して海外に生活する日本の子供達の健

全な成長のために役立てなければならない研究テーマが山積している内容となった。継承日本語教育研究者の一層の活躍を願うところである。また、ほとんどの補習校がK-12の在校生を抱えているわけで、補習校関係者にはこの子供たちのかかえる問題点の年令による移行を大局的につかんでもらうことにより、より効果的なカリキュラムを組む

ことができるのではないだろうか。子供は年齢と共に日本語能力を伸ばしていくのであるが、年齢に応じた心の問題に平行して対応していくことが日本語習得をより活性化させることを、保護者には理解してもらいたいものである。そのためにも、関係者一同が自由にアクセスできるネットワークの構築がいそがれる。